

金の価値再論

—岡橋保氏に答える—

天沼紳一郎

小著『金の研究』(弘文堂)に対し、岡橋保氏は本誌第12巻第1号に書評を書かれた。その中で同氏は、著者の論旨の1つ、すなわち金の価値はその生産過程において不変固定化されているということに対し批判の矢を放たれる。曰く、「著者は……スミス以来さがしもとめられてきた不変の価値尺度を苦もなく発見される。金の貨幣名が固定していることは、その価格を一定不変にしていることではあってもその価値を固定化することではない。……1オンスの金の貨幣名を35ドルと確定しても、この同じ重量の金は社会的に平均的な100労働時間の価値をもっていることもあれば、あるいは80労働時間の価値であることも可能である」と。

だがまず不変の価値尺度を苦もなく発見したという私への讃辞は、私にとって過大である。おそらく岡橋氏を含め、凡そ経済学の古典に多少とも通じた者にとって、スミスやリカルドが充分意識的ではないにしても労働時間(労働日)を、またマルクスが問題意識的に同じく労働時間を、それぞれ価値尺度と規定したことは常識であり、しかもこの時間(日)の不変的尺度単位であることを疑う者はあり得ないのである。そればかりではない。これらの大経済学者達(とくにマルクス)は、この不変的価値尺度たる時間(日)を決して苦もなく発見(?)したのではないのであって、このことは彼等の論旨琢刻の跡に少しく思を致すなら極めて明かなことである。

しかしそれはそれとして、私がここで問題としたいのは、「1オンス=35ドルの金の価値は社会的に平均的な100労働時間であることもあれば、80労働時間であることも可能だ」という氏の言葉である。金の価値は、金が鉱業生産物である以上工業生産物と異なり、平均決定でなく限界決定であることは、経済学上の通念となっている。(但し、独立生産者が砂金地帯を自由に移動して、つまり独立生産者が制限された自然という生産条件から解放されていて、貨幣でなく一という意味は金の重量単位が価値尺度になってないということであるが一、単なる生産物=商品としての金を採取するというような場合を仮想すれば、金の価値は平均決定でありしかも固定化されず可変的だといえる。なほ砂金と異なり、金粗鉱=原料は鉱業労働の、そして金地金=完成品は製・精錬労働

＝工業労働の生産物である山金の場合には、金地金の価値だけを考えればそれは平均決定である。岡橋氏が金価値の平均決定をいわれる時、氏は以上のような論理を知っていられたであろうか？ 金のこの価値規定については、小論『金の研究』189～193頁、239～240頁参照。) こういう経済学上の通念を無視して、金の価値や価格について論文や書評を書くということ自体全く不可解であるが、しかし兎に角氏は金の価格が一定不変であることを認めながら、換言すれば氏は金の価値が金自体の自然的形態で表現されていること、あるいは金1オンスの価値は金1オンス=35ドルという価格で表現されることを認めながら、金の価値は100労働時間ともなり或いは80労働時間ともなると主張されるのはどういうわけであろう。

そもそも価値尺度としての金の機能においては、金の一定量(例えば1オンス)は労働時間の一定量(例えば100労働時間)に対する呼び名Nameとされているのであるが(『経済学批判』岩波文庫80頁)、それが氏のように金1オンスがある時は100労働時間の、また他の時には80労働時間の呼び名ということではまことにこまるのである。一定量の価値が、時間で尺度されると100になったり80になったりするが、金重量で尺度されると常に1だという論旨は常人のよく理解しうるところではない。岡橋氏はマルクスの言葉「1労働時間が6ペンスの金量で自から表示するなら、12労働時間では6シリング(すなわち6ペンスの丁度12倍……引用者注)の価値が生産される。」(『資本論』日評版、3、p.10)をよく考えるべきである。氏の論旨でゆくと、時間は不変の価値尺度でなくなってしまうが、このように時間を可変的価値尺度だとそれこそ苦もなく発見されたのは、経済学上氏をもって嚆矢としよう。そればかりではない。元来時間という価値尺度は、マルクスが論理の最も抽象的な段階において、価値量を規定するため論理上設定した抽象概念であって、現実的な商品価値の尺度たる金量と同一局面で軽々に論議し得ることではないのである。(拙稿「生産力の増進は商品価値を低下させるか」『経済セミナー』1961年10月号参照)。

だから岡橋氏は、金の価格が固定化していることを認

められる以上、1オンスあるいは35ドルの金が「100労働時間の価値であることも80労働時間の価値であることも可能であって」などという、軽卒なあてずっぽうをいわれないで、金の実際の生産過程を把握され、そこで産金コストを慎重に検討さるべきであろう。そしてその上で氏が、金1オンス=35ドルは時に100ドルのまたある時は80ドルや20ドルの、つまり35ドル以外のそれぞれ相違したコスト(価値)をもって生産されることを実証されるなら、私は直ちに私の著書の全結論を取消し氏の批判に服するであろう。

さて以上は、小著に対する岡橋氏の論評への一応の反論であるが、このついでに私は、金価値に関する氏の積極的見解につき一言論評を加えたく思う。氏はいわれる、「金は貨幣商品だから、それに対する需給の増減が、ただちにその価格の騰落とならず、むしろ一般商品価格の逆比例的な騰落にあらわれ、……その価値の増減は、その固定価格のために、一般商品価格の逆比例的变化として反映する。ここに金の価格が一般商品の価格と根本的にちがう所以がある(拙著『金の価格理論』参照)。著者はこの区別を看過して、というよりも、むしろこれら両者を同一視することによって、金の価格の固定化からその価値の一定不変を導きだすことができたわけである」と。だがこれは一体、何等か経済学上の所説と名付けられるものだろうか? 「金(貨幣)に対する需給」とは何の意味であろう? おそらく金(貨幣)に対する需要と金(貨幣)の供給ということであろうが(あるいは金=貨幣に対する需要と金=貨幣に対する商品の供給という意味か? それならこれは金=貨幣に対する需要と同じことである)、そもそも一般的にいて貨幣としての金に対し、需要の増減などという概念があり得るはずがないのである。貨幣は商品に対し、常に価値すなわち需要としてあり、商品はこれに反し貨幣に対し常に使用価値すなわち供給としてあるのである。貨幣と商品との相関々係を論ずる場合、貨幣に対する需要などという言葉を用意に用いると、貨幣と商品との区別を無視した放言とならざるを得ない。この場合強いて貨幣としての金に対する需要ということといえば、それは商品(使用価値)が少しでも多くの価値に転化しようと常に恋いこがれているということであり、その意味ではこの需要は無限であって増減などあり得ない(但し、貨幣としての金の供給となると問題は別である。これは購買手段の増減としてあらわれ、その増大の場合商品の市場価格を高め、減少はこれを下げる。もっとも減少の場合は、現実には代用貨幣が発行されようから、物価下落ということは論理と

していいうることにすぎない。しかしいづれの場合でも、金生産は固定的価値をもって行なわれるのであって、この点紙幅の関係上小著261頁を参照されたい)。岡橋氏はこういう貨幣論の初歩的な知識さえなく、金の価値も価格も一緒くたにして、それらが「一般商品価格の逆比例的な騰落に」あらわれまた反映すると主張する。

逆比例的騰落などといかにもむずかしそうにいわれるがこれは結局、一般物価が上れば金の価値も価格も下り、反対に前者が下れば後者が上るということにすぎないではないか。それでは金の価値と価格を同一視しているのは岡橋氏自身であって、その限り私とどこに意見の差があるろう。その岡橋氏がどこをおせば私に、「著者はこれらの区別を看過して」などと批判できようか。もっとも氏はいかにも知れない、自分が金の価格の場合は「一般商品価格の逆比例的騰落にあらわれ」、金の価値の場合はその「逆比例的变化して反映する」と説明しているのが判らぬかと。だがいかなる日本語の達人でも、この場合騰落と変化およびあらわれると反映するという言葉の差から、金の価値と価格を区別することはできそうもない。そしてただ氏だけが、この神インヒビション-タラ言葉の差から何かを感得するのであり、それは正に御筆先という外ない。また仮りに一步譲って、金の価値と価格を区別せよという氏の判批があたっているとしても、私は本来氏のように、交換過程における金の価値などというものを論じたことは一度もない。

いってみれば、金(貨幣)の購買力——それは断じて金の価値や価格ではない——は一般物価指数の逆数だ、つまり犬が西向きや尾は東、雨の降る日は天気が悪いということにすぎない岡橋氏の高説を身につけるため、氏の指示に従って『金の価格理論』を読まされた者は災難ではなからうか。

もっとも氏は、私の説を批判したり氏独特の新説を開陳されるだけではない。私が南ア連邦金鉱業諸会社の貸借対照表から産金コストを分析したに対し、「読者はこの分析のなかから数々の教訓をくみとるべきである」といわれる。私も人の子、こういう言葉はしんそ嬉しいのである。しかし私は、氏が金の価値をその生産過程において把握され本当にその教訓をくみとるまで、みだりに嬉しがってはならないのではなからうか。